

竺園寺坐禅会 寺子屋プロジェクト

2021年3月6日

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第5回 「鳴り物・鳴らし物」

今回はお寺で坐禅などに使われる道具、「鳴らし物」、引磬(インキン)や木板(モクハン/モツパン)などについてのお話です。

「引磬」の磬(ケイ)は、もともと中国の楽器です。

お寺の堂内で読経の折に使われ木魚と並べておかれているのが磬子(ケイス)、お家の仏壇にある「チン」を磬(ケイ)と呼ぶのだそうです。

引磬はこの「チン」が持ち手のついたふとんの上に固定されたもので、坐禅の開始、終了の合図に使われます。

第2回、「禅堂の食事」でも紹介されましたが、禅堂では食事や坐禅等を始めすべての行動・動作が言葉による合図ではなく、「鳴らし物」による合図で示されます。

言葉を発しないで「鳴らし物」で合図し、ものごとを進行させていくのには、行住坐臥、人の行動すべてがすなわち坐禅と捉えて、言葉の影響によって、他者の修行を妨げない、自分の修行も妨げられないという意味が込められているのだそうです。

それは、異なる場所であろうと人と人との動作の連携を図ることを「鳴らし物」で行うことで、人の動作中での瞑想を言葉の持つ自我を喚起する力によって妨げないためです。

木板は、打板ともいわれ、時を知らせるために打ち鳴らされるものです。

坐禅の開始、終了に当り、7回、5回、3回と連打されます。

木板は、五角形の分厚い板で、紐がぶら下がっていて、これを片手で引っ張り、もう片手に握った木槌でうちます。(この時、飽くまで手首を柔らかく打つのがコツ)7,5,3は、陰陽道での陽の数(奇数)であり、素数でもあります。(葬いの式では、4,2,3と陰の数-偶数で打ちはじめ、おしまい陽の数で閉めるのだそうです。)

禅寺での「鳴らし物」は、中国の昔の楽器に由来します。

和尚さんの見聞では、中国の街場のお寺で聴くお経は、現地の民謡にも聴こえ、日本の公民館でお年寄りなどが地域の民謡教室で楽しんでいる風景とも重なるそうです。

現代の中国では、お寺はいわば日本の公民館の役割を果たしていたり、あるいは観光地ではテーマパークの役割を果たしているように感じられます。

禅寺で「鳴らし物」によって生活を進行させていく事は、春が近づいて気温が上がり、梅などの蕾が膨らみ、蕾が膨らんでさらに花が咲いていく自然の進行と似ています。

禅寺では、日々の生活の調和と自然の調和は決して相反するものではないことの象徴かもしれません。

以上

古代から「三武一宗の法難*」や近くは文化大革命など度々の大弾圧のあった中国と、明治の廃仏毀釈、叡山焼討ち等例外的な攻撃の他は、当地にある国分寺や大仏建立、近くは江戸幕府の檀家制度等、「公助」の下で多くのお経の原典や建物が残ってきた日本との、歴史の違い、その一方、村ごと移住させられる体制の下でお寺がコミュニティの一端を担っている不思議さを考えさせられました。因みに「講」と言えば筆者が子供の頃に、田舎ではまだ「庚申講コシコウ」(仏教には直接関係がなく道教由来とのこと)が残っていて、近所の大人たちが庚申(カネツル)の日にお経を唱えた後、呑めや歌えでワイワイ夜を徹して過ごしていたのを思い出します。なお、矢切には立派な庚申塔と十一面観音像をおまつりする庚申塚があります。蛇足ながら。(*注 中国の4人の皇帝による大弾圧・廃仏) . . . 文責 中村彰利